

炉のけむり

不来方のお城の草に寝ころびて

空にすはれし十五の心

啄木

ひっそりとした城址の青草の上に大の字になって仰いで見ると、青空がだんだん眼の前に降りてくる。そのままスーと自分の体も心も漕ぎつけない蒼空の奥へすいこまれてしまうような恍惚感、こんな少年の日の思い出は誰にもあることでしょう。

近頃妙な気持になるのです。昔からよく話される難問ですが、この宇宙には限界があるのかないのか。限界があるのなら更にその外側の世界があるはず。また無限ならば、その無限とは？ その無限の、えたいの知れぬその中に自分の命がすいこまれていくということは思っても眼がくらみそうな。

今頃こんな愚かしいことを言いたしますのは、それが私自身の老年、つまりその先にある「死」への不安から来ているのです。

蒼空を仰いで無限だの永遠だのという深い感傷や強い感動はあるでしょう。それで何か心が充たされた思いの

するのも事実です。しかしそれは一時的です。ひるがえって自分が今死んだらどうなる。

どこへ行くのかと思ってみると依然として不安です。そこには無限も永遠も消えてしまつて、周囲には濁った騒々しい世間があるだけなのです。

無限といい永遠といいその中に自分の命が溶けこんでしまふと考えられている限りでのそれらは、結局自身自身の延長の上に考えられたものにすぎないのではないのでしょうか。「死」への不安をもったままの自分の延長でないのでしょうか。いやそうではない。無限永遠とは死後のことなんだ、死後そこに入るのだと言われるかも知れませんが、不安は現在なのです。今の自分そのものの不安なのです。この自分の中にある今の不安が招きよせる無限永遠は、現在生きている私自身に対応する限りでの、私の限られた生に対応する限りでの永遠無限ではないのでしょうか。それでは私の不安は依然として片づかぬわけです。

そうすると真に私の欲しているものは、私の生死全体を包んだ無限永遠でなければなりません。「生」と「死」とを頭の中で二つに分けていることがそもその間違い

なのででしょうか。事実、生は死に裏づけられての生です。一瞬一瞬生きていくということは一瞬一瞬死んでいることに外ありません。切り離すことの出来ない生死そのものを一つに包んだ永遠無限、生に対応する限りでの無限永遠をも共に裏づけ包みこんでしまっている真の永遠無限。それはもはや思議することの出来ぬものでしょう。不可称不可説不可思議そのものなのでしょう。古人が「自然法爾」としてしか言い表しえないとされたそのものではないでしょうか。

「苦しい時の神頼み」という諺があります。日常生活で毎日自分の生きていくことに気がつかぬほど平穩無事である時には、神や仏は無縁です。神や仏を思い出すこともなければ、まして頼む必要もありません。ところがその生活が何かにつまづいた時、幸福なくらしの流れが何かにさえぎられ邪魔された時。不幸が立ち向かって来た時。不幸の極を「死」と呼ぶならば。生の中に死の影がさして来た時、人は日頃の落ち着きを失って、オロオロして、神様が降りて来て下さいませよう祈ります。降りて来て貰いたくならざるを得ません。

ところでそんな都合の良い神仏がおいでになるもので

でしょうか。神も仏もご不在の時がおありと見えて、いくら手を合わせて拝んでみても、何の返事もなさらないことがあります。生きているこの毎日毎日に耐えられなくなり、こんなことで一体何の為に生きているのか、と自問すればする程、神や仏を恨みたくなくなります。「神も仏もあるものか」とのろいたくなります。始めから神仏がないとは思っていないだけに口惜しく腹が立つのも無理はありません。

神仏が有ると思う心と、無いと思う心とが相闘います。「自分」という土俵の上でこの二つが取っ組み合います。勝負がつきそうもありません。え、どうなってもよいや、勝手にしろと勝負を投げ出してみたところが、土俵だけは残ります。自分という土俵そのものは投げ出しようがないのです。

それならば土俵そのものをはじめからなくしてしまっていたら取っ組み合いも出来ないし、勝負も消えるはず、もともと自分という土俵があると思いきんでいたことが幻想だったので、その幻想の上に神仏を招き寄せようとしていた、神も仏もその幻想の中のものにすぎなかったということではないでしょうか。自分で作っていた幻想を、自分の影を、神仏として拝んだり頼んだり、それで

思うようにならないと恨んだりのろったりしていたことになるようです。自縄自縛です。しかしこの悲鳴の中に、身から出た錆を払い落し自縛の縄から何とか脱れ出たいという無意識ながらの焦慮と反省が聞かれるとすれば、この脱自己はどうして行われるのでしょうか。

ここでもう一度大空を見上げてみましょう。

「宇宙的宗教感情」を言う人があります。宇宙の現象の背後にある究極的なもの、一つの大きな眼に見えぬ意志、そういうものに対する畏敬の念。

これが我々の宗教的本質であって、こういう普遍的なあるものを持たないことには、今日の戦争とか世界平和とかの問題についての原則が出て来ない、といわれるのはその通りでしょう。しかし戦争とか平和とかはいわば現実の世界内の事柄です。宇宙的といっても世界の中にとり入れられた限りでの宇宙です。この自分を中心にした世界の延長の極大にすぎないような気がします。つまり生の半面はそこに包みこまれても死の半面の自分が残されているということになりませんか。

現象のうしろに何ものかがある。この何ものかとは、自分自身の投影に過ぎなかったとすればもともとこの世には神も仏も無いのが本当かも知れません。

「神や仏もないのではない。死んだのだ」と、はつきり宣言する人が出て来てても不思議ではありません。こうなると人は神も仏もない世界に生きる自由です。あるかも知れぬ、時にはあつてほしいと願っていた神仏が、死んでしまった。何ものにも頼ることは出来ない代わりに、何ものにも命令されたり拘束されたりすることはない。人自らの決断によつて自分自身を創り上げてゆかねばなりません。自分の価値を自分の手で創り出してゆくところに人間としての本質が出来上がってゆきます。一切の既成の権威や組織や規定にとらわれてビクビクすることはありません。世界の問題は人間自身が解決するのです。その場合はじめから善いもの悪いものというものは存在しません。すべてはその時その時の場所の状況の中で自分がどう関わるかによつて善にもなり悪にもなります。一切は所謂トップの中での主体的決断によるのです。ただし、今ここで現に起こりつつある事柄に関して、何がふさわしい生き方であるかを考えようとする主体性には、同時にそれなりの「責任」が伴います。自分が自分の良心に従つて責任をもつて判断し決断してゆくこれが日常生活であつて、一言にして「神の前で、神と

共に神無し」に生きることだと言われます。

この態度は雄々しく明るく朗らかで、いかにも人間にとって都合良さそうに思えますが、一口に主体的決断といっても実際にはなかなか容易なことではありません。人間にとって自由はかえって重荷であり、我々は自由ではあるが、自由であることから自由ではない。自由の刑に耐えなければならぬという罰、神仏を殺してしまつた罰をてきめんに受ける生き方に甘んじなければならぬという結果になりそうです。

神仏という「絶対」が死んでしまったとすれば、一切は相対的になってしまひましょうから、各人にとって新しく絶対性をもつたものを見出さねばなりません。一様に相対化されている現代という状況の中で、「どうしようもない時どうしたら良いのか」を解く鍵、主体的な絶対性を、この相対の世界の中で探り出すことが嫌でも応でも要求されることとなります。

これでは神仏ははたして無くなつてしまつたのでしょうか、それとも姿を変えて「有る」のでしょうか。良心と責任とにおける「主体性の決断」によって確かにこの世間の道は生々とその様相を新しくすることでしょう。しかしこの決断は、すでに生死を前提としているのであ

つて、生死そのものを決断、克服するものではないようです。

主体性そのものの脱主体が残されているのではないのでしょうか。

「隠れた宗教」と「顕われた宗教」という区分によつて考える人があります。教会や寺院で聖書を読み経典を聴く運動は「顕われた宗教」であるし、教会や寺院を離れて自分で聖書経典を読み親しんで行くとすれば「隠れた宗教」であるとす。聖書を読んでいるから必ずしもキリスト教でなければならぬことはなく、仏教の経典に親しんでいて実質的にはキリスト教的な宗教感情に近くなっている人があつてよろしいのである。ここでは既成宗教としての伝統的な形体様式はともかくとしてそこに本来秘め湛えられているはずの生命の源泉を直接にくみとろうとするのでしよう。実際既成宗教の実質的な存続が問題になつている現代では、「顕われた宗教」よりもむしろ「隠れた宗教」の部類に入るの方が案外多いかも知れません。

これは先の「宇宙的宗教感情」の立場を一般的前提としながら、さらに一步具体的に既成宗教の方に近づいた

考えであると思われる。それだけに現実には働きかけようとする機運がそこに醸成されることでもありません。その意味でしょうか、この「隠れた宗教」になっている部分が、今後どういように方向づけられて行くかが、人類にとって重大な意味を持つと考えている人もあります。

そうすると一体既成宗教の特質は何でしょうか。

物質文明の世の中の一切が科学の力で掻きまわされ押しつぶされかかっている現在、「既成宗教は何をしているのだ？」というきびしい叱責や非難の声がよく聞かれます。

既成宗教の特質は、端的に言って「行」にあると思います。それぞれの宗教によって違っていますが、いずれもそれ自身を象徴する伝統的な「行」を掲げています。宇宙的宗教感情なり隠れた宗教なりの立場ではこの点が確立しないようです。

というのは「行」は単なる感情や観念や思想に止まるものではないからです。それは意志的肉体的行為です。

宗教の生命はこの「行」の伝承にあり、その事は思想（教）が人から人へと肉体を通して相続されて行くことを意味するのだと思われます。宇宙宗教感情とか隠れた

宗教の立場では、この点に大きな困難があることでしょうか。

第一に、そこには「行」が欠けているようです。あっても第二義的にとられましょう。次に「人」がありません。「人」とこの「行」について敬い且つ導いてくれる人です。

人は「思想（教）」を信する前に「人（他）」を信じ、翻ってその証（あかし）としての「行」を「人（自）」の上に求めます。その「自他と」教えとを嬉々とはつらつたらしめるものが「信」に裏づけられた「行」でしょう。「信」は対話です。「行」は言葉です。知識は人を孤独に駆り立てます。それは対話を拒み対話をさげすむからです。（現代人は孤独だといわれ、現代は人間不在だともいわれます）

既成宗教はこの行を、とにかくにも保持して来ています。伝統の有難さでしょう。所謂現代の知識階級の人々が、その「行」の外側に立って既成宗教を批判することは容易です。しかし先ずこの「行」を自分の「観念」の中にでなく「肉体」の中にとり入れることの方が先決問題ではないでしょうか。そうすれば我々の先人の努力や苦勞がどんなものであったかが、多少なりとも察しえら

れようというものです。事実、仏教について言えば、何れのお祖師様達も先ず伝統の中に自分自身を投入して、そこからあらためて出発し直されたのでした。

自然科学から見て地球の歴史が数十億年であるのに人類のそれがやっと百万年にしかならないといわれています。しかも、自然の中に埋没し自然と共に生きて来た最初の百万年から、徐々に自然に立ち向い自然的環境に積極的に働きかけながら人類独自の文化を創り上げて来たのは、僅か数万年以来のこと、人類の祖先が人間という「意識」に目覚めて以来人間性は今日まで質的には変化していないといわれています。その間人類の歴史がどれほど苦難に充ちた限りない体験を乗り越えて来たことか、それと同時に生命の自己保存と持続への願求実現の為に避け難く伴い生じたであろう諸々の煩悩。利己心、貪欲、憤怒、憎み、嫉み、愚痴、が現在も我々の内に益々賑やかに健全(?)に息づきつづけていることは不思議ではありません。さらにもし人類以前、二十五億年前の生物の起源から、生物としての長い進化の履歴にまで遡ることが許されるならば、無生物系から出発した生物進化の各段階における原子分子のエネルギーの消長変化が、何らかの潜在力として我々の生命の内容となっていると

すれば、宇宙の最初の生命誕生以来の各世代一切の行為の効果の累積の総決算が今日の眼前の世界であり、その中にいる自分だということになりましょう。当然のことながら私達が自分の内をのぞいて見て、そこに人間の本性にひそむ恐ろしい様々の矛盾、真と偽、善と悪、美と醜、聖と魔、冥闇混沌の層々無尽に渦巻いているのに気がつくと同時に、それらがそのまま外の世界に様々の様相を執って現実に展開されていることに眼を覆うことは出来ないでしょう。

こういう複雑怪奇な現実の世界の只中であって、宗教の「行」とはどんなことでしょう。仏教でよく引かれる例ですが、法華経の中にある常不軽菩薩のお話を記します。

過去　　と言ってもお経に出てくる時代の年数や、その中に生まれかわり生まれかわり出てくる仏菩薩の寿命の表現は恐ろしく天文学的数字そのもので、とても今我々の想像できないほど無量無限のものであるが、人類の内的体験の履歴書の上から見ると決して誇大虚構のものではなく、如何にもとつなずかれるものと思います。無数の仏様が相次いでこの世に出現して衆生の為に法を

説き、衆生それぞれの分に応じて悟りを開かせておられたある時代に、一人の僧があつて常不軽菩薩と呼ばれた。何故かという、この僧は日頃から經典類は一切読まないで、もっぱら礼拝を行とした。即ちあらゆる階層の人達に出会う度にその人に向かつて「私は深くあなた方を敬います。あえて輕慢致しません。何故ならば、あなた方は皆菩薩の道を行じてまさに仏になることがお出来になるからです」と言つて礼拝した。中には礼拝されてかえつて腹を立て悪口雑言したり杖木瓦石を投げうつものさえあつても少しも逆らわず、走り避けてなお声高く彼等を礼賛嘆してやまなかつた。こうしてその生涯を通してこの不輕の礼拝を行いました。

常不輕菩薩はこの後、法華經を讀誦することが出来、更に教えきれぬ程の永い時間の間に幾千万億の仏様達にお逢ひして修行し、幾代もくりかえして遂に仏の境涯に到達された、ということ。最後にこのお話をしておられたお釈迦様はこう言われました。「この常不輕菩薩というのは他の人ではなく今のこの自分であつた。その時悪口をしたり石を投げたりした人達は、今この話を聴いている弟子達、お前達である」と。

自分はこの世に生まれてからはじめて修行して仏にな

つたように思われるかも知れないが決してそうではない。いま話したように限らない過去からの長い間にわたる自覚と実践とに支えられた精神と肉体との精進努力の積み重ねの結果、ようやく今日の自分が成り得たのである、といわれるのでしょうか。

まことに唯一言の「お早よう」という挨拶すらも、誰にでもできるはずであつて、さてできるかできないかは、知る人ぞ知るです。ましてや家と家、国と国との間について考えるまでもないでしょう。どんな小さな行でも、それが現実化されるまでには、遠い昔からの眼に見えない無量無数の複雑な因縁の網の糸の結び目の如何に依ること、愛といい、憎しみといい、戦争といい、平和といい、表面限りの単に一朝一夕の生易しい観念的性質のものではないことを思わしめられます。「恨み骨髓に徹する」と言われることのあるのも当然でしょう。

「袖の触れあうのも他生の縁」との諺のように、人と人が出会うことも遠い肉体のつながりがあつてのことでしょう。それが友人となり隣人となり師弟となり親子夫婦となり、それ故にこそかえつてそこにあらずもがな葛藤を生み出し、この生ま生ましい人生をその大海の

波間の起伏の中にお互い浮き沈みしながら支えあっていることには、我々の思慮観念の到底及ばないものがあると思われます。

大切なことは、順縁のある所また逆縁があるということ。従って生きている限りこの避けることも出来ないし捨てることも出来ない順逆両縁の矛盾を、そのいずれにも止まることなく身心を挙げてそれをそのままに超え行かしまられる一道が「行」によって指示されていると教えられているのでしよう。

どうやら永遠無限の空のあなたを仰いでいた心が、今自分の足下に気づかされたようです。

「遠く宿縁を慶べ」とはこのことかと、雪の降りしきる夜の炉端で瘦せた膝をさすりながら、過ぎ来しの日々
のふるさと、しらかばの山、川、風、雲、声をかなしく
なつかしく想っている次第です。

昭和四十七年二月二十六日 記 村崎野にて